

25人が恋したら。

ミルキィ箱寄りのネロ推しミルキアン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バンドリ！ガールズバンドパーティー！のメンバー25人が恋をしたら1人1人どんな感じになるんだろう…？どんな恋をするんだろう…？と個人的に気になったので書いてみようと思いました。

25人それぞれに相手がいって、5バンドそれぞれに対応したオリジナルバンドも作る予定です。

兄妹設定なども入れようかと思っているのでオリジナル要素が入ります。

果たして25人はどんな恋を見つけるのでしょうか？

目次

5人の恋バナ〜Poppin, Party〜

1

5人の恋バナくPoppin' Partyく

「ねえ、みんなって好きな人いる？」

「…また随分急だね、おたえ…」

「え、そう？」

「好きな人？いるよ！私はねー、ありさにさあやにりみりんにおたえーそれから蘭ちゃんにモカちゃんに…」

「あーはいはい。そのままだと結局ガールズバンドパーティーのメンバーになるだろ。そういう事じゃないだろ。」

「そうなの？じゃあどういふこと？」

「は!?!おたえがそれを聞くのかよ！くそ！はめられた！」

「あ、ありさちゃん落ち着いて…」

「まあまあありさ、ありさはあれだよ？男の子のことだと思ったんだよね？」

「……」

「ありさく？」

「ありさ、顔赤い。」

「くく!!ああそうだよ！恋愛関係のこと聞いてるのかと思ったんだよ！っーか急にそんなこと聞かれたら誰だって思うだろ！」

「ありさが爆発したく！」

「うるせえ！」

「へくそうだったんだ。」

「お前がとぼけるな！」

「まあまあ落ち着いてっば。ありさ。可愛いなあ。」

「…さあや、バカにしてるだろ。」

「してないよ笑」

「絶対してる！」

「…恋愛かあ。」

「りみりん？」

「あ…！ごめんね！なんでもないの!!」

「りみりん、もしかして好きな人いるの!?!」

「そうだったのか？全然気づかなかった…」
「ち、ちがうよ！そんな人いないけど！」
「え？いないの？私とは遊びだったの？」
「へ…？おたえちゃん!？」
「お前はさつきからやややこしいこと言うな！」
「あはは…んー、じゃあ恋愛に興味があるとか？」
「それは…うん…。」
「うわあ！りみりん可愛い!!」
「だ、だって、少女漫画とか、すごい素敵だなって…思って…うう…
めっちゃ恥ずかしい…。」
「恥ずかしがることないよりみりん。恋したいって思うのは女の子な
ら普通のことなんだから。」
「さあやも恋する乙女だもんなく？」
「…ありさ、からかってる？」
「さつきのお返し」
「さあやの好きな人って、和樹くん？」
「か、かすみ…」
「かすみにしては鋭いな。」
「だってさあや、和樹くんと話してる時すごく可愛いんだもん！」
「ど、どういうこと？」
「あーなんか、分かる。乙女って顔してるよな。」
「それ、めっちゃ分かる〜！」
「確かにあの顔は和樹にしか見せないね。」
「だよな。幼なじみを思い続けるってホント一途だよな〜」
「…私はそのうありさの方が乙女だと思うけど？」
「な、なんでだよ。」
「だってありさ、よく少女漫画とか恋愛映画とか見てるよね？憧れて
たりするんじゃないの？」
「はあ!?そんなわけねえだろ!!」
「ホントに〜？」
「そ、そんなことより！今はりみの話だろ！」

「え…？でも、私も気になるな、ありさちゃんの話。」

「りみ!？」

「ほらほらくりみりんもこういつてるんだしく！私も聞きたいなくありさの恋愛の話〜」

「うん。気になる。」

「お、お前らな…はあ…。私には恋愛なんて無理だよ。」

「えく、なんで？」

「そもそも、私達女子高っていう時点で男子と接点が無さすぎるんだよ。さあやはともかく…。それに私なんて特に、男子となんて話さなすぎて、恋愛なんて出来るわけないし。」

「でも、ありさはしてみたいんでしょ？恋」

「そうだよ〜！素直になりなつてありさ〜！」

「ああもううるせえな！」

「…でも、私も分かるな。ありさちゃんの気持ち。」

「りみ…」

「確かに恋してみたくなって思うけど…やっぱり自信無いし…きつと私も、もし誰かを好きになつても、何も出来ないと思うから…」

「自分の気持ちに素直になればいいんじゃない？」

「おたえちゃん…」

「私だつたらそうするよ。」

「あのな、みんながみんなお前みたいに考えられるわけじゃないんだぞ」

「うん。でも何もしないで最初から願いが叶わないことが分かつてる方が私は嫌だから。」

「……」

「それにりみは可愛いよ。すつごく。私が保証する。」

「おたえちゃん…ありがとう。なんか私、めつちや感動しちゃった…」

「おたえつてこういう所、なんとにかすごいよね…」

「ホント。油断ならないな。」

「え？何が？」

「でも、恋つてすごいね〜！こんなに人それぞれ考え方違うなんて！」

「…そういうえばかすみはどうなんだよ？」

「あ、私も気になる！」

「え？私？…うーん…：…：…わかんない…？？」

「え？わかんない？」

「うーん…私ってどうなんだろうね？」

「こつちに聞くな！お前の気持ちだろ！」

「でも、そういうえば今まで考えたこと無かったな。ポピパの活動とか、ガールズバンドパーティーとか、学校とか今すごく楽しいから全然頭になかった！」

「あはは…なんとなくかすみはそうだろうと思った…」

「うん。すごく分かる。私もバンドのことだけ考えて生きてる。」

「それは言い過ぎだろ…」

「あ、間違えた。ウサギのことも考えてる。」

「あはは、おたえちゃんらしいね。」

「やっぱりおたえもそうだよね！バンドってホント楽しいんだもん！でも、恋愛か。私もいつかしてみたいな」

「ま、結局男子と接点がないから難しいんだよな。」

「そうだね。それに私もやっぱり今のままでも充分すぎるくらい楽しいもん！」

「私達は高校生という貴重な青春時代をバンドに捧げてるんだね。」

「…おい！お前なんでこのタイミングでそういう言い方するんだよ！」

「え？何が？」

「だから…！」

「まあまあありさ落ち着いて。みんな、今思い出したんだけど、接点作ろうと思えば作れるよ。」

「え？さあや、それってどういうこと？」

「これ見て。」

「このポスター…ライブの？」

「そうなんだ。和樹がバンドに所属してるのは知ってるよね？実はこのイベント和樹のバンドが主催でやるらしいんだけど、ポピパも出な

いかって、誘われたんだ。」!!

「「「ええええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」

「な、なんでそんな大事なこと忘れてたんだよ!!」

「え、あータイミングがなんとなく無くて。」

「そういう問題じゃないだろ！普通に無理だ…」

「ど、どうしよ…男の子と…うう…」

「えーPとありさとりみりんは微妙な感じ？かすみとおたえは？」

「「出る!!!」」

「乗り気だね。」

「もちろん出たい!!!新しく友達出来そうだし!!ライブやりたかったし!!!」

「私も会場でギターが弾きたくてうずうずしてた。」

「い、いやちよつと待て落ち着け2人とも。ちよつと待てばライブなんていくらでも出来るだろ。ガールズバンドパーティーのメンバーでやることだって出来るし。そんな急にやること…」

「でもせっかく和樹くんが誘ってくれたんだよ!?こんなチャンス滅多にないよ!!」

「で、でも向こうだってよく知らない人達と一緒にじゃやりずらくないかな…?」

「それは大丈夫だと思うよ。和樹がみんな同意の上で誘ったって言うてたし。」

「じゃあ大丈夫だ。これは参加するしかない。」

「いやでも…」

「お願いありさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！りみりー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「か、かすみちや…」

「私からも、お願いします。ハンバーグ交換してあげるから。」

「おたえがハンバーグを交換だと…!?!」

「…ふふっ。いいよ。参加しよう。」

「りみり!」

「みんながこんなに言ってるのに出ないのはもったいない気がするよ。ちやっつた。」

「ありがとうりみりん!!! ありさは!?!」

「……はあ。この状況で何を言ってももう無理だろ。降参。ただし！
その……私の様子がいつもと違ってても、そこは突っ込むな。」

「え? いつもと違うって?」

「さあや分かるだろ。頼むから察してくれ…。」

「あはは、了解。それじゃあ和樹には参加するって伝えとくね」

「ありがとうさあや! ライブ、楽しみだなあ!!!」